【土木史研究　第13号　1993年6月　自由投稿論文】

旧江戸武家地の空間構造の変遷に関する研究

㈱都市計画設計研究所　正会員　小谷 俊哉
埼玉大学　正会員　窪田 陽一

A Study on the Transition of Spatial Structure
in Samurai's Living Quarters

by
Toshiya Kotani & Yoichi Kubota, Dr. Eng.

概要

都市の空間構造の変遷に寄与してきた要因の一つとして、都市内部における地域性や場所性が挙げられる。特に江戸時代、現在の東京中心部の大半を占めていた江戸の武家地は、封建社会崩壊後の土地利用改変の上で重要な役割を担っていたと考えられる。本研究では旧江戸の市街地を、江戸城を中心とした放射・環状軸線によって地域分割し、各年代における身分階層別の土地利用形態を把握することを主要課題として、空間構造の変遷を追った。その結果、武家地間での階層別の住み分けが起源となって、明治以降、昭和戦前期までの地域や場所ごとに固有の土地利用、土地所有形態が存在していたことが明らかになった。

【ｷｰﾜｰﾄﾞ:武家地跡、空間構造】

1．序

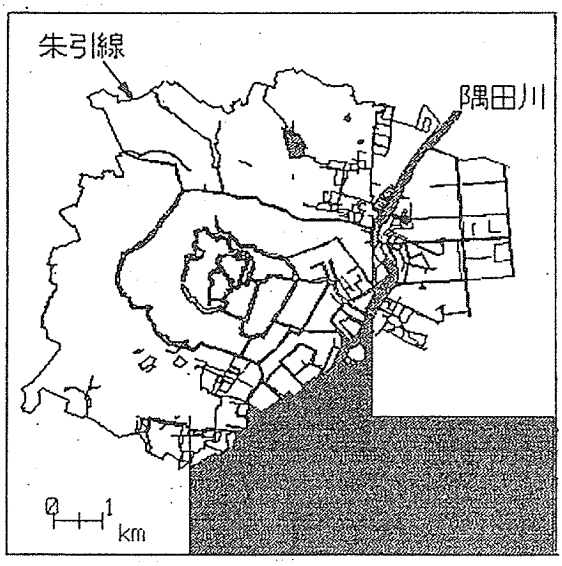
(1)研究の目的

都市の空間構造は各時代の社会情勢、都市計画、土地所有者の変化等によってもたらされるものである。この変化の中には、都市内部における地域的あるいは局地的な場所としての機能や位置付けが要因となった空間が存在するものと考えられる。従って本研究ではそのような空間を見いだすこと、つまり地域・場所固有の特質によって変化してきた都市の空間構造の変遷を把握することを目的とした。

(2) 対象範囲及び年代

江戸時代に形成された旧江戸の武家地は当時の市街地であった御府内（朱引き線内部）の大半を占めていた。これが大政奉還による武家社会の崩壊を起点として、江戸時代の武家地に多様な変化を経て今日に至っている。

本研究では都市の空間構造としての変遷を研究する上で、対象範囲を概ね江戸時代の市街地に相当する御府内（1818(文政元)年、幕府により裁定されたもの）、つまり朱引きの内側とした（図－１）。



図－１：江戸の御府内

1590（天正18）年に徳川家康が江戸に入国して構築した初期の市街地は、現在の外堀と隅田川とで囲まれた地域に留まっていたが、19世紀に入って市街地が拡大したのに伴い、奉行所の管轄区域を明確にするためにこの「御府内（朱引）」が決定された経緯がある。ただし、本研究では対象範囲をこのうちの隅田川以東の区域は除く。また対象年代は、江戸の武家地が形成された後の幕末期から、その後の空間構造が大きく変化し続けた昭和戦前期までとした。

（３）研究方法

研究の手順として、まず旧江戸の市街地の地勢や骨格軸などといった構造的な概観を行う。そして武家地の分布状態を把握し、旗本・御家人の居住地と階層が高い大名屋敷地との関係を明確にする。さらに明治以降の武家地跡の土地利用の変化を追うことによって、地域性や場所性といった空間固有の特質を見いだすことにした。

２．江戸御府内の概観

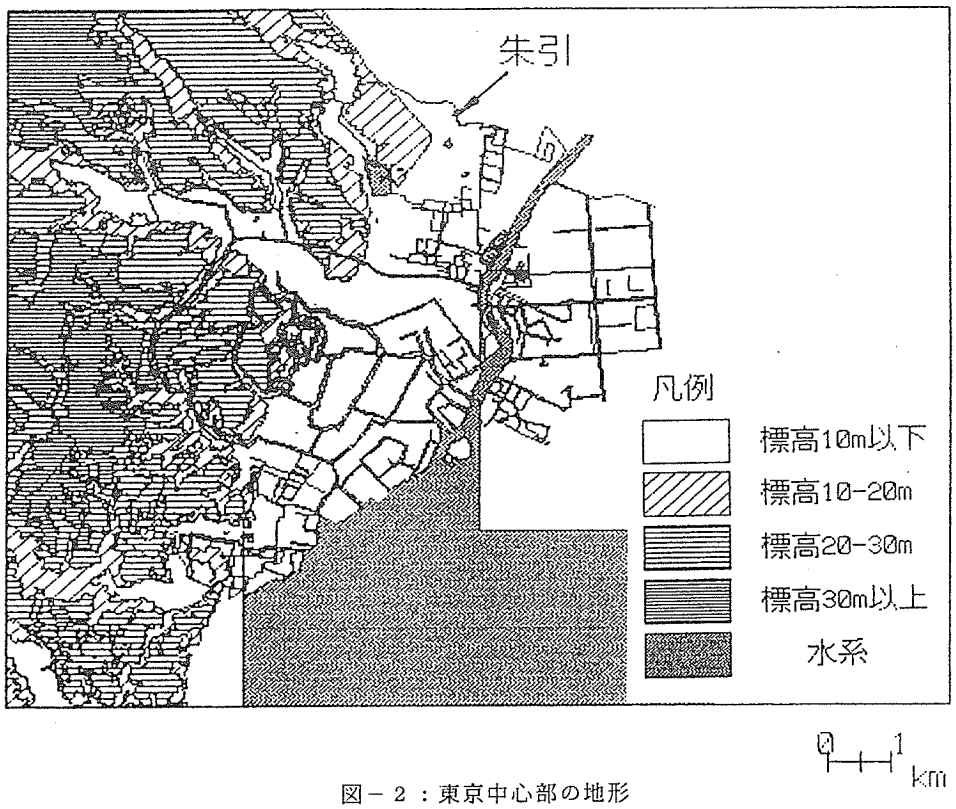
江戸の武家地の変遷を把握する上での前段階として、江戸の市街地であった御府内の地勢及び街区構造、そして武家地の分布状況の概観を行った。

（１）地形的特性（図－２）

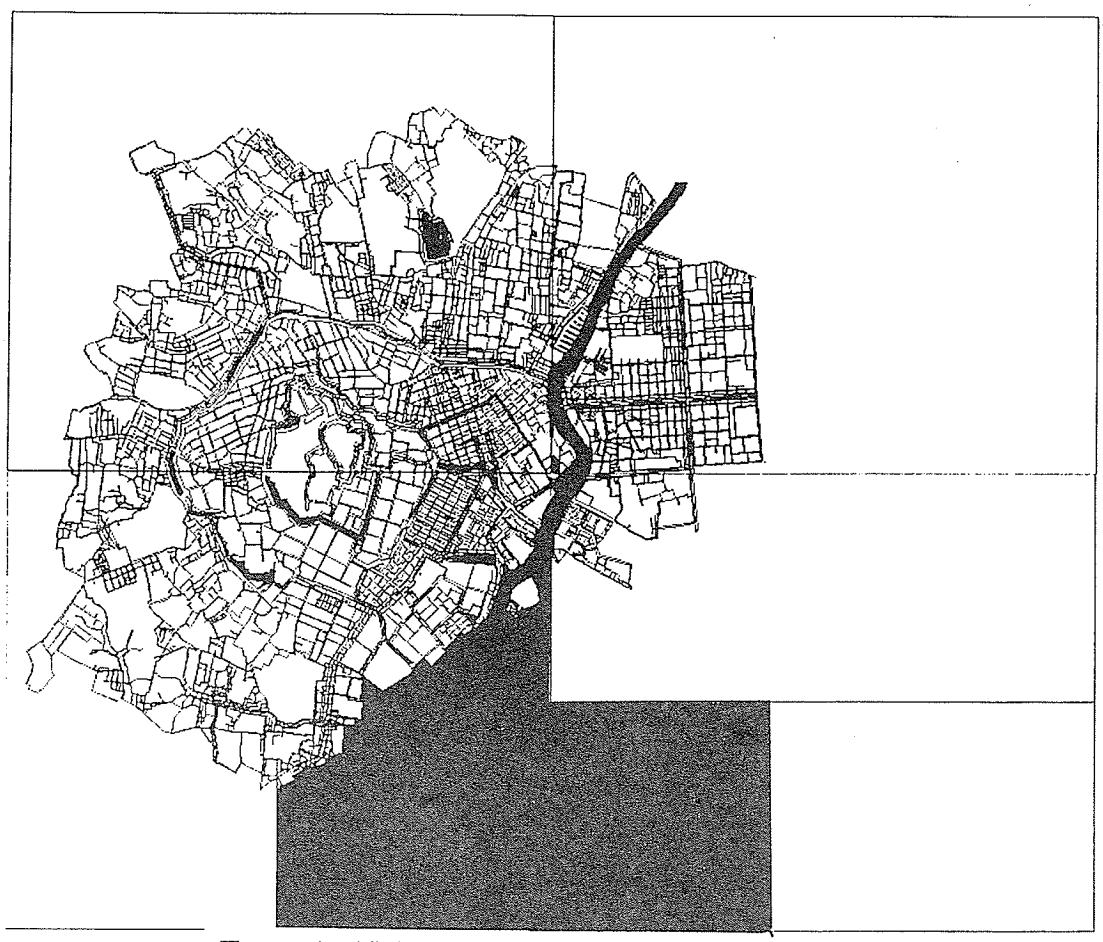
江戸城を中心とした市街地周辺の地形的な特性としては、西側は標高20-30m程度の山の手台地が江戸城（現皇居）の半ばまで迫り出す。この台地を刻み込むように谷が走り、この地形構造によって、台地内部での高低差を生み出している。また江戸城の東側は、標高10m以下の平坦な下町低地となっている。

（２）街区構造（図－３）

図－３から伺えるように江戸時代の街区構造は、江戸城の南側の地域において大規模なものとなっており、他に西部・北部の一部にも比較的大規模な街区が存在していた。



図－２：東京中心部の地形



図－３：江戸幕末期の街路（1862（文久2）年）

0 1 km

（３）武家地の分布（図－４）

図－４に示すように、旧江戸の市街地内部は武家地が大半を占め、なかでも外堀の内部では大名屋敷とその他の旗本・御家人の屋敷地とに区分されている。一方、外堀の外部地域、特に西南部においては混在した分布となっているが、図－２の地形図と照合させてみると、山の手台地上でも標高の高い場所においては大名屋敷地が分布している事が分かる。さらに、図－３の街区構成を示したもの照合してみると、大規模な街区となっている部分は大名屋敷地が立地している場所である。

この結果、武家地内部においては身分階層が高い大名屋敷地が規模として広大な面積を有しており、かつ、山の手台地内では標高が一層高い場所に存在していたことが分かる。

３．骨格軸による地域区分

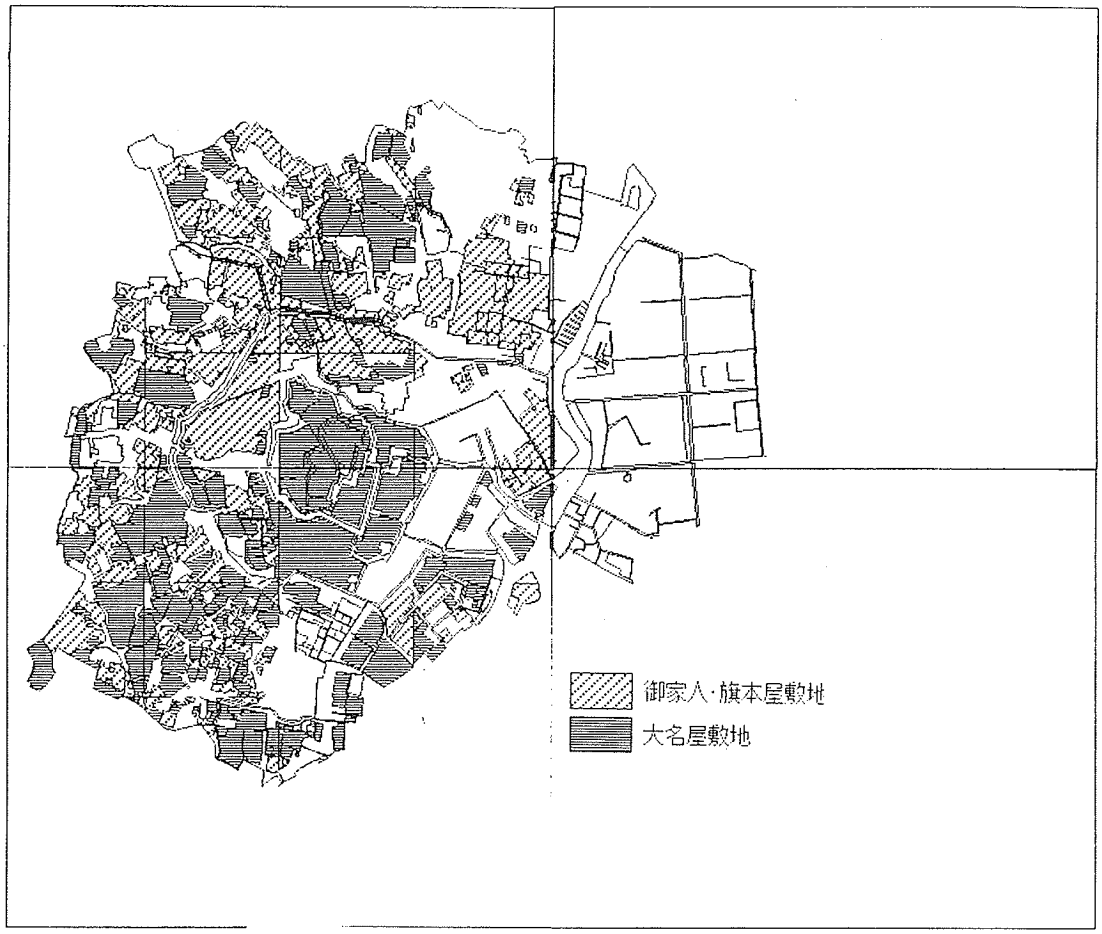
前述の概観で述べた事に加え、江戸に於いては都市の地域を区分する主要な要素としての骨格軸が存在していた。

（１）放射状軸

幕末の江戸の骨格構造は、街道筋が旧江戸城を中心として、そこから放射状に延伸しており、かつ沿道の町並みを形成する要素となっている。この放射状軸に該当する街道として、東海道、中山道、奥州街道、日光街道、甲州街道そして、赤坂見附より延びる大山街道がある。

（２）環状軸

江戸城からの距離を明確なものとする要素として環状軸の存在がある。それは江戸時代初期に構築された内濠と東部の外堀によって一つめの環状軸が、

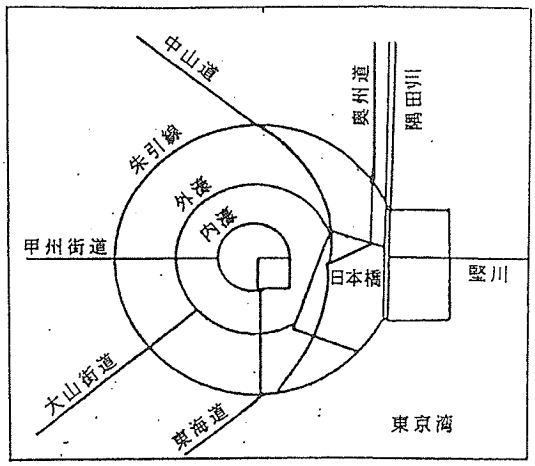


図－４：江戸幕末期の武家地の分布（1862（文久2）年）

0 1 km

西部の外濠及び神田川と隅田川で第二の環状軸、さらに市域の境界線である朱引線によって最外郭の環状軸を形成されていた。本研究では武家地跡の変遷を追う対象の範囲外としたが、隅田川以東においては河川による軸構造が整然としており、堅川・小名木川の東西軸線が、玄の堀川（堀大横川）、横十間川によって南北の軸線を形成していた。

これらにより、図－５に示すような江戸の御府内の地域区分というマクロ的な構造図を得る。



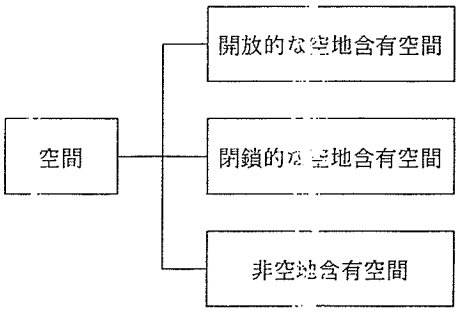
図－５：江戸御府内のマクロ的構造

４．空間の考察概念

2章において概観したように、武家地においては大名と旗本・御家人という階層の差異が、敷地の規模および立地条件を異なったものにする要因となっていた。大名屋敷地は空間的には敷地内部に庭園など、

広大な空地を有するものが多い反面、公には開放されてない私有地であった。

そこで空間固有の特性を考察する上で空間の空地含有性、公開性に注目し、明治以降、武家地跡が公開された空間となるか否かに留意することにした。そこで本研究においては敷地内に空地や緑地等を含有するもののうち、一般に公開されていたり、往来が可能な空間を「開放的な空地含有空間」として扱う。具体的には公園・墓地・外苑・生産緑地等を指す。また敷地内に空地などを広く有するが私有地或いは公有地などで一般の立ち入りが困難な類は、「閉鎖的な空地含有空間」として扱う。具体例としては、江戸時代の大名屋敷地や明治以降の皇族用地・外国公館・軍用地等を指す。そしてこれに該当しない建坪された空間を「非空地含有空間」として取り扱う。これには官庁用地などが含まれる。厳密に言えば、敷地内に非建坪の空地を全く有しない空間は希であるが、本研究では広大な空地を有する武家地跡が公開されたか否かに重点を置くので、敷地内の空地含有面積比率を特に規定せずにおく。



図－６：空間の考察概念

５．武家地跡の変遷

図－７から図－９に掲げるのは明治以降の旧武家地跡の土地利用状況である。ここで取り上げたものは高階層者が所有するものであり、空間所有の継続性あるいは移転性などを把握する事を試みたものである。

（１）年代ごとの土地利用状況

a）1909（明治42）年頃の土地利用（図－７）

市ヶ谷の尾張屋敷跡に陸軍士官学校など軍用地が閉鎖的な空地含有空間として継承されているのが特徴的である。また、北西部の戸山練兵場などの軍用地や新宿御苑（南西端）は旧朱引き外部に立地していた。　現在の赤坂・青山周辺では明治以降、江戸時代の旧御三家の紀伊屋敷を継承した赤坂離宮を中心とした図であるが、他に青山墓地、青山練兵場などの軍用地、外国公館が点在する。このうち殆どが標高20m以上の高台に位置した。現在の麻布周辺では朱引き外部に、軍用地、及び皇族用地が概ね標高20-30mの最も高い範囲に収まっている。

b）1925（大正14）年頃の土地利用（図－８）

市ヶ谷付近では外濠外部は前年代と大きな変化はないが、内部に外国公館が増加した以外に変化は見られない。赤坂・青山付近では外国公館が増加しているのが目につき、標高20m以上の高台にそれぞれ位置していた。朱引き外部では白金の軍用地が一部を残して皇族の御料地に用途変換された。

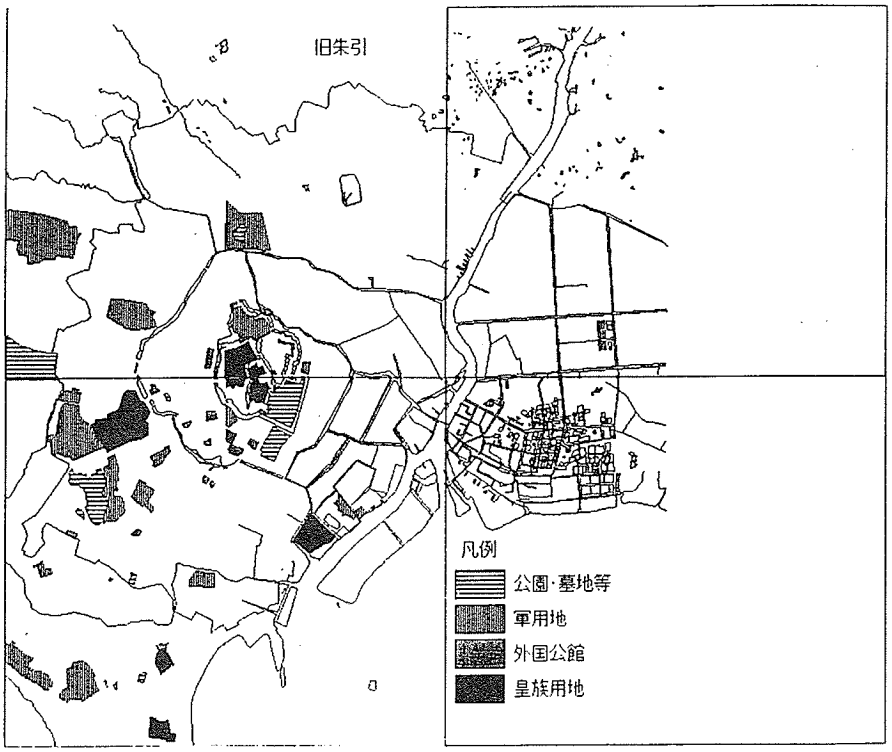
c）1937（昭和12）年頃の土地利用状況（図－９）

全体的に前年代と比較して大きな変化は見られないなかで、西南部の地域で外国公館の増加が見られた。また旧朱引き境界外では高松宮御用地の一部が有栖川宮記念公園として賜与されるなど、一般への空地の開放があった。

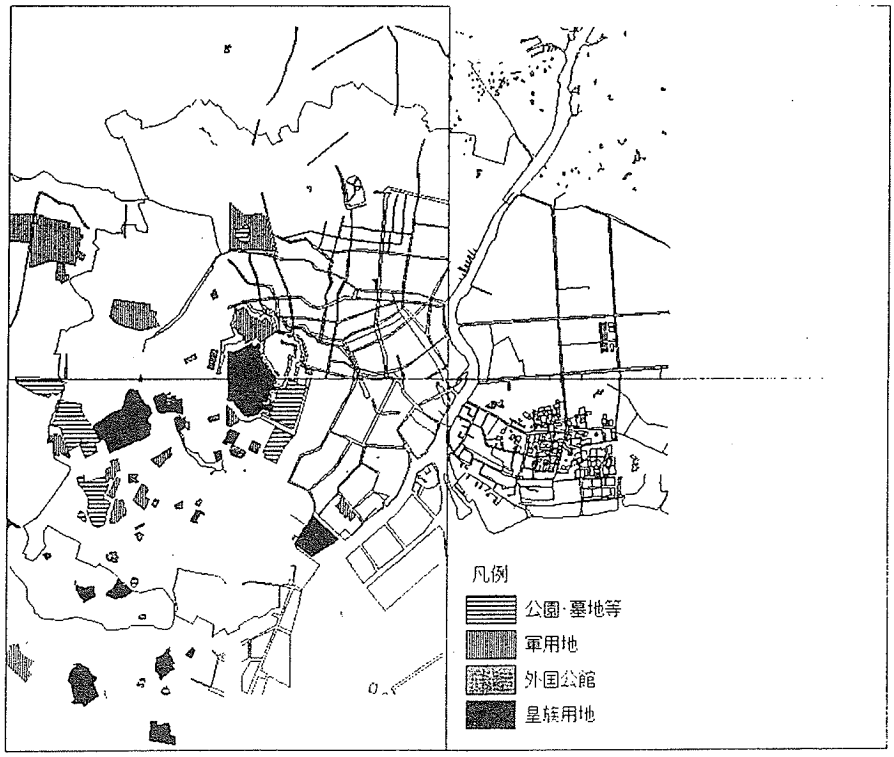
（２）まとめ

a）外国公館・皇族用地の集積

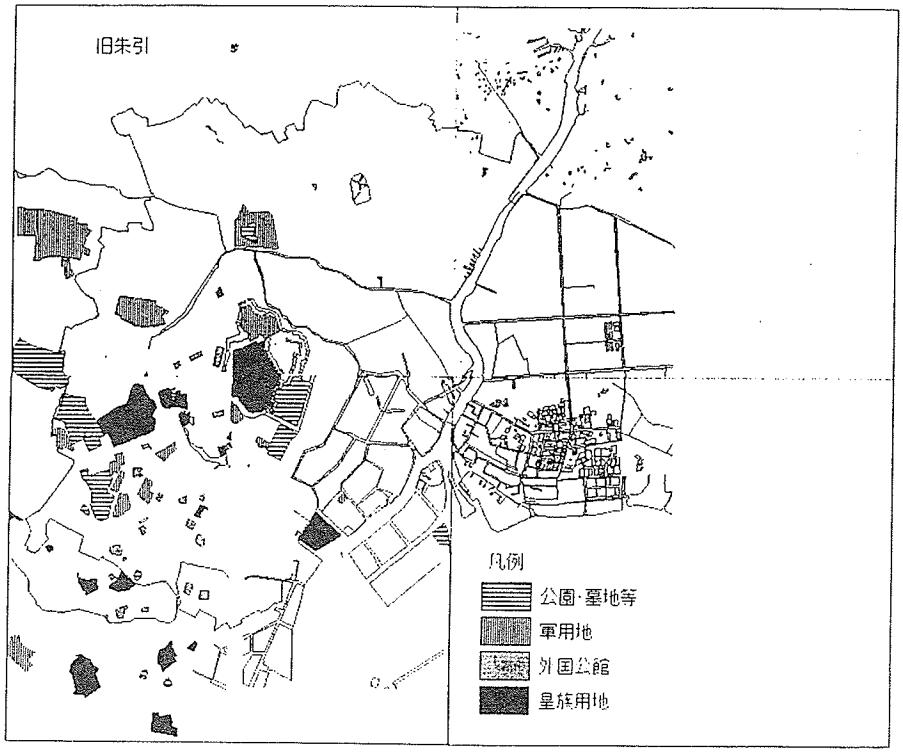
明治初期、諸外国の公館（公使館・領事館）や皇族の邸宅は現在の千代田区内、特に永田町や霞が関に多く立地していた。その後、明治後期までにはその殆どが現在の港区内、麻布近辺の武家地跡に移転がなされ、空間としての高階層の所有者に継承され、この意味で空間の持続性が存在しているといえる。また、新規に公使館を構えた国も麻布の地が選ばれている。永田町・霞が関からの転出については、後に行われた官庁集中計画（これは殆ど挫折しているために結果としてはこの時期に外国公館の移転は見られない）や市区改正計画・震災復興計画など東京市中心部での官庁施設をここに集中させるという政策によって、はじき出された形となった。この集積そして移転は、都市の機能が再編されて中心地における必要な機能が変化したために起こったものといえる。



図－７：1909（明治42）年頃の土地利用



図－８：1925（大正14）年頃の土地利用



図－９：1937（昭和12）年頃の土地利用

b）軍用地の集積と移転

明治期に出現した軍用地は、江戸時代の大名屋敷地同様、都市の中核部である宮城（皇居）や諸官庁を防衛する形で配置されている。これは明治政府が旧武家屋敷を上地し、その跡地の利用方法として、この広大な面積を有する土地が選ばれたと考えられる。従って、場所の用途としては江戸時代初期のものと変わりがなく、時代を経てもその地性格が維持されていることになる。大名屋敷・軍用地という閉鎖的な空地を含有する空間が移転する場合、都市の中心部から外側へ外延化するという傾向があった。その跡地は、引き続き閉鎖的な空地を含有する空間と開放的な空地となった場合があったが、いずれも場所を所有する階層に変化は見られなかった。

明治期に出現した軍用地は江戸時代の大名屋敷地同様、都市の中核部である宮城（皇居）や諸官庁を防衛する形で配置されている。これは明治政府が旧武家屋敷を上地し、その跡地の利用方法として、この広大な面積を有する土地が選ばれたと考えられる。従って、場所の用途としては江戸時代初期のものと変わりがなく、時代を経てもその地性格が維持されていることになる。

６．結論

本研究では江戸時代の江戸の御府内における武家地が明治以降の土地利用でどのような空間に変遷したかについて考察を行った。

「開放的な空地含有空間」に対して「閉鎖的な空地含有空間」という一般に立ち入りが困難な地であってもその敷地内に緑地あるいは非建蔽の空地を有する土地が、いわゆる「開放的な空地含有空間」と史的にどのような関係があったかについて、　さらに個々の場所に固有の特質が存在する可能性について考察した。

この結果、標高差による空間の違いを探った場合、標高差によって場所を所有する階層が異なることが多かった。周囲に対して高台の地に立地する空間を所有する高階層の者は、近接する周辺の低地部と異なる階層であっても標高的な「距離」が確保されていた。

地域的な特性としては、特に外濠内部における土地所有階層は継続して引き継がれ、外濠外部の西南の地域も同様であることがわかった。

移転による土地利用変化の観点では、閉鎖的な空地を含有する空間が移転する場合、都市の中心部から外側へ外延化するという傾向があった。その跡地は、引き続き閉鎖的な空地を含有する空間と開放的な空地となった場合があったが、いずれも場所を所有する階層に変化は見られなかったということである。移転先もその前用途が大抵の場合同等の階層であり、場所が同一の階層によって継承されているといえる。

追記:本研究で作成した図面は、参考文献2)に掲げた埼玉大学工学部、建設工学科、設計・計画工学研究室において開発したｼｽﾃﾑを筆者がﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑを一部修正して活用したものである。

参考文献：

1)小谷俊哉・窪田陽一:皇居周辺地区におけるｵｰﾌﾟﾝｽﾍﾟｰｽ的空間の歴史的変遷に関する研究,第12回土木史研究,土木学会,1992年
2)窪田陽一・佐竹勝義:地図ﾃﾞｰﾀを中心とした土木史情報検索支援ｼｽﾃﾑに関する研究,第12回土木史研究,土木学会,1992年
3)樋田満文編『明治時代東京区分図』東京堂出版,1976
4)『明治・大正・昭和 東京1万分1地形図集成』柏書房,1983
5)地図資料編纂会編『日本近代都市変遷図集成 5千分の1
6)『江戸-東京市街地図集成 1657-1895』 柏書房,1988.11.25
7)地図資料編纂会編『日本近代都市変遷図集成 5千分の1
8)『江戸-東京市街地図集成Ⅱ 1887-1959』柏書房,1990.6.25
9)『明治大正日本都市地図集成』柏書房,1986.10.25
10)『昭和前期 日本都市地図集成』柏書房,1987.3.25
11)『戦災復興期 東京1万分1地形図集成』柏書房,1988.4
12)『東京百年史』第一巻付図, 東京都
13)内藤昌『江戸と江戸城』鹿島出版会,1956
14)鈴木博之『東京の地霊』文藝春秋,1990.5.30
15)越沢明『東京の都市計画』岩波新書,1991.12.20
16)越沢明『東京都市計画物語』日本経済評論社,1991
17)末松四郎『東京の公園通誌 上・下』郷学舎,1981
18)猪瀬直樹『ﾐｶﾄﾞの肖像』小学館,1986.12.20
19)坂田正次『神田川物語』研文社,1980.10.25
20)江波戸昭『東京の地域研究』大名堂,1987.3.27
21)清水教行,渡辺貴介
「江戸における広場的空間の特性と変遷に関する研究」土木史研究10号,pp.103-112,1990.06
22)高原栄重『都市緑地』鹿島出版会,1988.9.30
23)北島正元編『土地制度史Ⅱ』山川出版社,1975.5.
24)只木良也編『みどり 緑地環境論』共立出版,1981
25)川崎房五郎『明治東京史話』桃源社,1968.10.10
26)「1万分1地形図（1934(昭和34)年）」国土地理院
27)「1万分1地形図（1988(昭和63)年）」国土地理院
28)田村明『江戸東京まちづくり物語』時事通信社1992.4.10
29)EDWARD RELPH『場所の現象学(PLACE AND PLACELESSNESS)』
高野岳彦、阿部隆、石山美也子共訳, 筑摩書房, 1991.9.20
30)『東京緑地計画概要』東京府土木部土木庶務課編算,1938.4.20
31)『東京の公園百年』（東京都建設局公園緑地部編,1975.3.31